

テント日誌 4月7日(木)版

侵攻から虐殺の露呈へと進むウクライナの動向から

三上治

いつも何らかの形でやる花見を今年はしなかった。いや、テントひろばの面々がやった花見に出かけて行ったのだが、時間が遅れてしまってこれはもう終わっていた。連れ合いの仕事帰りに合わせて近所でやるささやかな花見も今年はやらずに過ぎた。忙しくもあったが、どうも今年はそんな気分になれなかったのである。櫻さんごめんなさいである。やはりロシアのウクライナ侵攻(侵略)のことが重苦しくのしかかっているためだろう。僕らの気分を無意識に支配しているものと言っている。なかなか眠れない。考えまいとしてもついついウクライナのことを考えてしまう。心地よく眠れるということができなくなってしまっている。

ロシアの侵攻(侵略)によって生じている様々に情報を目にしながら、僕の想像は暗い方に向いてしまう。日常生活を破壊され別れ別れの生活を余儀なくされている人々の姿、無残な死に追いやられた人々の事、どのように復興が考えられるのか想像もできない破壊された街の光景などは気持ちを沈んだものにしてしまうだけである。

この理不尽で野蛮な光景の中で、救いはロシア軍に立ち向かい抵抗する人々の姿であり、死の恐怖に抱えて闘う人々の姿である。そこに一つの希望を見出しているが、それとてそれは廃墟の中のダイヤモンドのごときのものである。本当は目にしたくないというか、痛々しさの伴うものだ。

電撃的な進撃によって、キーウを制圧し、傀儡政権を樹立するというプーチンのシナリオを打ち砕いたウクライナの人々の抵抗というか、闘いは感動的なものである。この戦争をプーチン(ロシア)の敗退(敗北)として前進的に解決していく方向を切り開いているものだ。

暴力と力によって隷属を要求する行為に立ち向かう人間の尊厳をかけたこの抵抗に僕は感銘を受ける。本当は外から感銘を受けるなどといっけいはいけなようなさまざまの事を含み持ったものであろうが、僕はそれでもそこに畏敬の念を持つ。これはプーチンの非人間的な蛮行(権力の所業)に対する怒りの対極にあるものだ。ただ、これはロシアのウクライナ侵略によってやむなく出てきたものであり、本当はなくてもよいものだ。悲劇を内包したこのような抵抗はなければならないでいいことだ。そんな思いはついて回る。

このことは僕になぜ、プーチンはこうした蛮行をしたのかという問いかけに生む。プーチンは誰からみても、いかなる口実を設けようとも、言い訳の不可能な侵略という行為を特別作戦ということをごまかす。大義なき戦争であることは誰の目にも明らかだからこそ、特別作戦という言葉をごまかそうとする。

日本が中国大陆での戦争を事変として胡麻化したことを想起する。やはりヒトラーが導入に、それをプーチンが今、真似ているのだと思う。ただ、今回のプーチンのこのウクライナ侵略という行為はその理由というか、動機の見えにくい行為であった。この理由はプーチンの今度のウクライナ侵攻(侵略)は時代ものというか、一時代前の戦争というところがある。誰かが19世紀の戦争と言っていたが、そういう様相がある。

現代では国際法も含めて禁じられている、禁じられた戦争となっている戦争だということがある。だから人々の常識に反する戦争だという側面があり、戦争の理由や動機が見えにくいと人々が思

うところがあったのだ。これはプーチンの国家戦略が公開されずに秘されてきたことも大きかったのだが、彼の政治観や戦争観が古典的なものだとすることに起因することもあった。この点はプーチンの国家戦略がいくらか明らかになってきた今では幾分かは明瞭になってきたといえる。

僕はこの戦争はプーチンがNATO拡大などでロシアの安全保障が脅かされるというよりは、プーチンのロシア国家の統治に危機が生まれ、それを乗りきるために戦争という賭けにでたということ推察した。

NATOの拡大がロシアの安全保障を脅かすという理由、ロシアを軍事的脅威にさらすというのはもっともらしく聞こえる。だが、少し分け入って検討すれば、NATOがかつてワルシャワ条約を形成していた諸国(社会主義共同体を構成した国。あるいはソ連圏と呼ばれた国)の紛争に軍事介入したわけではなかった。ソ連圏やソ連邦の解体は NATO やアメリカの軍事介入で起こったことではなかった。だから、この安全保障の危機というのは現実性を感じさせないものだ。

旧社会主義共同体を形成した国が NATO に加入していくのは、旧ソ連邦、現在ではロシアに対する軍事的脅威を感じていたためである。今回のロシアの行為はそれを示したように思う。

アメリカの軍事的脅威論はソ連時代から常套手段であるにすぎない。プーチンはそれらの国がロシアとの戦争を避けざるを得ないことを歴史的に知っていて(NATO やアメリカが参戦してこないことを熟知して)、ウクライナ侵略をやったのである。制裁は予想外のことであったかもしれないにしても。

プーチンが政権座についたのは 2000 年の初めであり、それから 20 年以上が過ぎ、彼は 2024 年の選挙を控え、終身大統領制を目指している。彼はイデオロギー的には保守主義を名乗り、その政治を民主的独裁と称しているが、スターリン政治と類似したことをやっている。

スターリン体制下の秘密警察を再編し、政敵の毒殺や暗殺という恐怖支配、メディアの統制と脅かし、選挙の不正などの内政と強国と大国を目指す外政があり、それはスターリンとは名目は違うが同型の独裁国家を作っているのである。

ロシア帝国の復活がその方向性となっている。チエチエン戦争がナショナリズムを喚起させ、プーチン政治の支持を高めたように、戦争は独裁的な国家統治を強める役割を果たした。戦争を繰り返して国家統治(独裁型の国家統治)を強めてきた明治以降の日本と似ていなくはない。

こうした彼の政治が抱えている危機こそが、今度の戦争の動機をなすものであり、それこそが秘されてきた戦争の理由だと思う。これは両刃の刃のようなものであるが、事態はそれを表すように進んでいる。戦争は始めた瞬間は権力者の支持を高める。その批判がその国家内部から出てくるのはある程度の時間の経過を必要とする。ロシアの内部のプーチン批判はその意味では異例の速さで進んでいるが、プーチン政治の終わりののはじまりであることは明瞭だと思う。

ロシアの軍隊が演じた民間人の虐殺ということが発覚し、ロシアの戦争犯罪行為が衝撃となっている。僕は旧ソ連軍が第二次世界大戦末期に満州で行ったと言われる行為を想起した。

ここでのソ連軍の蛮行は多くに人に知られており、語られもしてきた。しかし戦後はソ連が戦勝国であったためそうした蛮行や非行は隠されてきた。それはファシズム国の戦争を暴き、それを裁くことが急であったためである。これはアメリカの戦争についてもいえる。

東京裁判が戦勝国の戦争犯罪、犯罪的行為を裁かないという点での批判を僕はしてきた。ただ、右翼や保守派の東京裁判批判とは日本の戦争の擁護という点で違っていた。彼らの東京裁判批判の眼目は日本などの敗戦国の擁護にあったが、僕は戦勝国の戦争犯罪の裁きを欠落させていることを批判してきた。

こういう事情が旧ソ連軍の戦争犯罪を暴かないできたが、それを多くの人は知っていたのだと思う。それに戦後の左翼は旧ソ連や中国を支持し、ソ連の戦争は正義の戦争であるとしてきたから、こうした旧ソ連軍の犯罪的行為は不問に付してきた。

この問題をきちんと総括しなかったことが、今、ロシア側のあれは捏造だというプロパガンダを信じる部分を生み出しているようにも思う。そこには戦後の左翼が旧ソ連の戦争は正義の戦争としてその蛮行は不問に付してきた伝統が無意識も含めて残っているように思う。

ロシア軍が演じた戦争という犯罪行為に対してそれは捏造だという反論がロシア側から出されている。これは民間施設などの攻撃についても。戦争下では正確な情報が出されないことは誰もが知っている。

情報戦といわれる現在の戦争については特にそうである。僕らはそれをどのように判断すればいいのか。正確な情報ではなく、嘘の情報出すこと当然のことしているかぎり、それは戦争がいかかわしいものであることを示しているのだが、僕らは情報通じてしか事実を知らない。どうすればいいのか。結局、これは、情報を受け取る側の判断に委ねられるのである。僕はそこで二つのことを基準として考える。自分が情報を読むときの基準である。

例えば、プーチンは嘘つきであるという情報がある。信用できないという。他方でそれはデマであるという情報がある。その場合にどちらの情報を信じるかという時の基準の一つは情報を発する人の社会や国家が情報の自由がある社会か、どうかの一つの基準になる。

表現の自由と言ってもいい。これは相対的なことだが、一つの基準になる。言論統制や表現の統制の厳しい国とそうでない国との差異はある。これは相対的なことだが、ここは一つの基準になる。例えば、今回のロシア軍の虐殺ということに、ロシア側とウクライナ側から正反対の情報がだされる。僕はロシア側の情報を疑わしきものとみる。

これは今回の侵略という行為をロシアに非があるとみているためではない。それはロシアが情報の自由が許されずに統制下にある社会だからである。これはコロナ感染の発生した中国の情報を信じるか、どうかと言った時も考えたことだ。中国の情報を僕があまり信用していないことには中国における言論統制や自由の抑圧がある。

それに比すればウクライナや西欧諸国には相対的にせよ情報の自由とか、表現の自由がある。この差異は重要なことだ。情報を信じる基準になる。現在の自由度は相対的なものだが人類の歩みがこの獲得のために歩んできた歴史を考えると、この差異は大変な重みのあることがわかる。

それは多くの人々がどの情報を信じるかというときに一つの基準として選んでいることでもあると思う。これはコモンセンスでもある。

僕らが、表現の自由や情報の自由が重んじられ、文化風土としてあることの重要性を考えることも、これとかかわっている。情報を統制し、情報を制限する度合いの強い独裁国家の情報に信用を置かないのはそのためである。僕は情報化社会の中で、情報を受け取る側の判断の基準として考えるのだが、これは大事ことだと思う。

僕はロシア側のプロパガンダそのままとは言わないが、どこかの新聞だの、映画だの引用をして、あたかもこの戦争はウクライナ側に責任があるかのような言説を見るたびにうんざりする。情報を疑い、自分の頭で考えた形跡が全く見えないのだ。

もう一つの基準は歴史を読むことである。情報を読み主体的に判断するには歴史的な認識が必要である。その、鍛錬というか努力が必要であると思っている。それが国家的プロパガンダに取り込まれることを免れることになると思う。

半藤一利が指摘していたように国家が戦争について本当のことを語らないことは、その属性である。というほど寝深いものである。半藤は日露戦争について日本国家は戦史を遺した(3部ほど)が、それは公的に語られてきたものとは全く違っていったという。公的に流布されてきた戦史は偽造というべきものであったと。そしてこの3部は公には隠されてあったのだ、半藤は司馬遼太郎が本当のこの戦史を読んではいなかったと推察している。

彼は司馬がこの戦史を読んでいたなら『坂の上の雲』は違っていたと推察するのだが、戦争についての国家的情報は偽造という国家の都合のいいように脚色して流される。今回の虐殺情報を見ても僕らはそういう背景のあることを認識し、目に唾をしてかからなければならない。

そのときの情報を読むには旧ソビエトやロシアの、あるいはアメリカや西欧諸国の戦争の歴史について認識する努力が役立つのである。僕は半藤一利や保阪正康が日本の戦争についての歴史を探索することを強調しているのを知ってはいたが、僕はそのことが、今回のウクライナ侵攻についての情報を正確に読むことに役立った。そう言う意味では歴史の探索は偽造情報にごまかされないために重要だ。

今回のロシアのウクライナ侵攻についての評価がいろいろだということが伝えられる。多くの団体やグループで意見は分かると伝えられる。僕のネットなどでもそうである。それと同じように様々な提言もある。僕がそこで何よりも感じているのは僕らが傍観者のような位置にあることだ。

これは善悪の問題ではなく、世界の構造からやってくるのであり、ここは自覚的であるほかないということだ。この戦争においてどういう立場をとるにせよ関りというのは難しいし、細い道としてのみ可能だということだ。そこを踏み外せば善意からであれ、悪意からであれ、途方もない提言などがでてくる。

今回の戦争について言えば僕の立ち位置は明瞭である。それはウクライナ人々の抵抗を支持し、ロシアの侵略を批判するということであり、そのことは明瞭である。ロシアの侵攻にも幾分かの利はあるとか、ウクライナ側にも問題はあるとかの考えは安易にいうべきではないと思う。これは結

局のところ、ロシアの侵攻を容認することになるからである。このところはよくよく考えるべきである。

ロシアの侵略に抵抗し、ロシアを敗北に追いやることで戦争をなくしていくことは現在考えられる一番現実的なことであり、それは現在の一つの希望でもある。そしてウクライナの人々を支援し、ロシアの敗北に追いやるためには世界は武器の提供も含めてあらゆる支援をすべきである。

ここでの線引きは各国の参戦ということになるが、これはすべきではないと思う。これは戦争を国家間戦争に一般化してしまい、ロシアの侵略の言い分を認めてしまうことになるからである。そしてまた、この戦争を拡大してしまうからだ。

ここを線引きとした支援はいかなる形でもいいのであると思う。経済制裁は言うまでもないことだ。今回のロシアの敗北という形はロシアの降伏という形ではなく停戦という形になる公算が大きいと思うが、そこではウクライナ側に主体というか、ヘゲモニーがあることを明瞭にしておくべきだ。こういう原則点を明瞭に持ちえない停戦の提起は無意味であるばかりか、ロシア側の理をみとめることになってしまいかねない。そこは注意のいることだ。

僕は先のところで僕らがこの戦争に関われるのは細い道をとうしてだと言った。また傍観者のような位置をとられると。これはこのロシアの侵略が国家的行為であり、この戦争と闘う道はその対象になった人々(ウクライナ)の人々か、ロシアの人々しか直接的には持てない。他の国家の人々は国家行為という媒介を通してしてしか関われない。今回の侵略に対してウクライナ以外の国家が参戦することはやめるべきであり、参戦は否定されるべきだとすれば僕らの関りは細い道になる。この参戦についてはアフガンやイラク侵攻時に日本の参戦が呼びかけられたこととは逆になるが同じことである。

僕はかつてベトナム戦争時に義勇兵として関わりたいと思った、これは、今、思えば、傍観者のような立場に置かれていることへのいら立ちがあり、僕なりに実践的(現実的)に関りたいと思ったからだ。これはそんなことで関わり得ないのだ反省をもたらすことになった。もし若ければ僕はウクライナの要望に応じて義勇兵に参加したかもしれないと考えた。しかしその場合は国家の成員から離脱してのことである。現実的にはこの戦争への関りは遠いのだし、少しも近くなることではないと自覚してのことだ。

僕らは国家を媒介にして関わるしかないのだし、さしあたって日本が国家として参戦することを否定しているのであれば、そして、それに賛成ならこの参加は精神的支援にしかならないと思っている。

僕らがこの戦争に現実的(実践的)に関係できるのは細い道でしかない。ベトナム反戦闘争が曖昧あったのは、国家にどのような対応を取るべきかの現実的方向を提起するのが難しかったからである。アメリカのベトナム戦争介入に対して日本の国家が同調して参戦することを拒むというのが、僕らの提起できることだった。その意味では日本がアメリカに同調してベトナムに参戦する

ことを拒否することは実現したが、日本の国家は参戦する、そのように国家を変えていくのかどうか、どうかは当時の国家権力の方向としては不明だった。

当時の首相は安倍晋三に叔父にあたる佐藤栄作だったが、彼は心のどこかで参戦を望んでいたのかもしれないが、日本の国家を戦争のできるように変えていく方向を志向しているのか、どうか不明だった。

だから僕らはベトナム反戦闘争を日本国家権力の動きとの闘争に発展させられなかった。国家の動きが見えなかった。当時の国家権力の担当者である保守の面々は政治的に巧妙だったのか、方向性で迷っていたのか、戦争についての道は隠していた。だから、僕らは国家のどの動きとの対決にベトナム反戦闘争を持っていくのか明確にできなかった。日本のベトナム参戦阻止までは明瞭であったが、それ以降は目標を持てなかった。ベトナム反戦闘争が広がり盛り返りがあった割には発展性を欠いた理由だった。

ロシアのウクライナ侵略に反対し、ウクライナの人々の抵抗闘争を明確に支持することは日本国家がウクライナ側に立って参戦することではない。支援は参戦との間で線引きすべきである。こうした中でのウクライナの人々の連帯は何処にあるのか。ウクライナ人たちの闘いに関われる道はどこか。

それは日本の戦争をできる体制構築の動きに反対することである。ということは、日本がウクライナの抵抗と同じようことができるように国家の軍備強化をせよということではない。逆である。日本がロシアのような国家にならないということである。日本の国家軍備の強化は自衛のための軍備強化を名目にしてロシア的な軍事大国になることだからである。

国家権力の側は日本が戦争をできる国家体制にこの動きを誘導せんとする。このための機会にしようとする。これは、日本がロシアのような戦争国家になることだ。自衛という名目でロシアのような戦争国家にしていく動きと言え。「核所有」や憲法改正などのことと言え。これを拒むこと。迂回路のような道だが、日本を戦争させない国家にすることが、ウクライナの人々に連帯しロシアの侵攻に反対する道なのだ。

ここでは今度のロシアの侵攻がなぜ生じたか、それを通して戦争とはどうして起こるのか、その認識、その共通の認識を広めることがまず重要だ、それを根底にした反戦運動が必要なのだと思う。

プーチンの意思ではじめられた戦争を見て、僕は憲法の前文をすぐに想起した。憲法の前文は権力者の恣意で戦争が行われることを否定している。このことがすぐに思い浮かぶ。憲法を改正し、プーチンの支配するような国家にすることは、プーチンの支配を拒んでいるウクライナのひとたちに連帯することではない。

僕はウクライナ人々の抵抗をロシアの侵攻に対する抵抗としてみるのだが、その中には非戦、こんな戦争をやらせないということを含んでいるとみている。これは自然発生的な意識かもしれないが、「奴隷になることを拒む、自由を守る」という言葉には人々の暴力を持っての隷属を求める戦争を拒むということもあるように想像できる。ウクライナ人たちの抵抗はロシアの侵略に対する

自然な抵抗として生まれたのかもしれないが、それはそこにロシアのような戦争をなくしたいという思いがあるように思う。

それはプーチンの戦争に反対するロシアの人々への期待と連帯でもあるだろうが、それは世界に各国の人々に自国での戦争体制に批判的になることの要請が含まれてのいるとみていいと思う。ロシアという軍事大国のウクライナ侵略は弱者の暴力的蹂躪だが、それへの抵抗で他軍事大国に同じことをするなというメッセージを発しているのだと思う。だから中国はウクライナの人たちの抵抗を恐れ、プーチンを支えようとしている。このメッセージはこれは日本が軍事大国になるなということでもある。そうであれば日本を戦争のできる国、また軍事大国にしないことが、それに関わり連帯する道だ。

僕らはウクライナの人たちの抵抗を通したメッセージを自国の戦争体制の強化の動きを拒めという、こととして読む。つまりは非戦のメッセージとして受け取らなければいけないと思う。それを人は希望的観測というかもしれないが、そうならそれでもいいと思っている。